

— 植村直己の少年時代 — (2の1)

(記 岡本)

植村直己の冒険家としての足跡は、驚愕に値する(注1)。直己は身長162cm、体重57~66kg、血液型A型、足の大きさ26.5cmである。足は大きめだが、さほど大きくない体軀からヒラリ一卿(注2)が勇敢で偉大な冒険家と称えたほどの足跡を残し得たエネルギーはどこに潜んでいたのだろう。

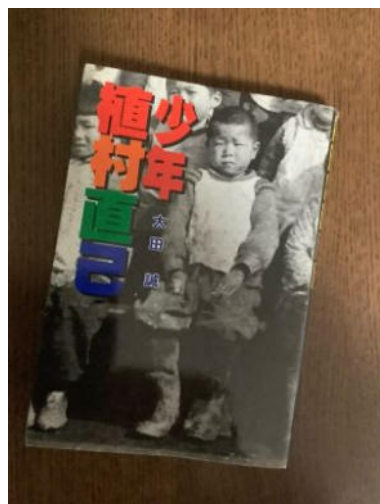
植村直己は「いやいやながら山登りを始めて10年目、とうとう世界五大陸の最高峰を全部この足で登ってしまったのだから、われながらビックリする」と述懐している。「好きこそ物の上手なれ」「梅檀は双葉より芳し」という。直己は少年時代から冒険が好きだったのか、また少年時代から芳香を放っていたのだろうか。

明治大学山岳部に入部してからの冒険家への道とその足跡は、メモ魔の直己自身が著した著書に率直に記されている。では、明大入学前の半生の直己はどんな少年時代を過ごしていたのか興味津々である。

植村直己は「家は但馬の寒村の貧乏農家で自分は7人兄弟の四(ママ)男坊、はみ出し者であると常々語っていた」が、これは謙遜に過ぎた言い方である。直己が生まれたのは、日本海に注ぐ円山川が貫流する但馬盆地の一角、コウノトリで知られる豊岡市日高町上郷(かみのごう)の農家である。植村家は少なくとも江戸時代の宝暦6年(1756年)より14代続く家系で豊かな農家である。兄弟は7人で姉二人の下に男子五人の構成で、7人の末っ子である。長兄修は10才年長である。直己という名前は、植村家の由緒ある「直助」からの「直」と蛇年生まれの「巳」をとって直巳と届けられたが、戸籍係の誤記で戸籍上直己となったという。

家業は豊かな農家である。父藤治郎は才覚を発揮して農業の傍ら製縄業を興し大阪、神戸に販路を持っていた。ビニール紐が幅を利かすようになると、長兄は同じように藁を使う畳床、畳店に事業を転換、拡充した。

植村直己の小中学生時代は、どんな子供であったのだろうか。小学校低学年頃、「休み時間になると姿を消してしまう、風のような少年だった。始業のベルがなると戻ってきてポケットから虫やどんぐりの実を出して見せた」という。小学5年頃より家で飼っている農業用役牛(但馬牛)



の世話をさせられ、円山川岸で牛の草飼いを手伝った。植村家の牛は品評会で上位入賞を果たしており、母梅は雌の子牛が産まれると赤飯を炊いた。雌が産まれると結構な現金収入になったのだ。「子供の時のいちばん楽しい遊びというと、やっぱり魚とりを思い出す。いろんな方法でやった。小中学校の頃は、そんなことばかりしていたような気がする」、田んぼに水を引く小川を堰き止めてザルですくったり手づかみにしたり、少し大きな川では素もぐりをしてヤスで突いたりして、フナ、ナマズ、ウナギ、ハエ(オイカワ)を獲ったり、円山川では引っ掛け鉤でアユを追っかけていたと楽しそうに語ってもいる。魚獲りにのめり込んでいた子供だった。

中学に入ると、牛の草飼いの他に炊事(飯炊き)が下校後の日課になるが、そんな日課から免れたいこともあって中学でバレ一部に入部した。背が低いので後衛であったし、3年で漸くレギュラーになる程度であった。高校進学のための補修授業をサボり、野原や川で遊ぶし、相変わらずヘビやカエルを教室に持ち込み驚かせていた。「自分が思ったことをやってしまう自由奔放なところがある」と生活指導要録に書かれていた。成績は中の上だが、理科と社会は優良賞を受けており、外国への夢を抱き地図を見るのが好きだった。中学校での出席状況は中学3年間を通じて精勤賞、3年の時は皆勤賞だった。

1956年(昭和31年)に兵庫県立豊岡高校に入学し、山陰本線の国府駅から豊岡駅まで汽車通学する。入学した年の5月に遠足で蘇武岳(1074m)に登った。クラスメイトと競争して登り、雪をガブガブ食べて舌を荒らしたという。山らしい山に登ったのはこれが初めてだったようだ。豊岡高校に山岳部があったが、関心はなく入部していない。高校でも相変わらずイタズラは続き、友人と学校中庭の生簀の鯉を焼いて食べたり、ストーブの煙突を雑巾で塞ぎ教室を煙だらけにして授業を中止させたりしたこともあった。クラブ活動をやる勇気もなく、そうかといって勉強もせず学校の反乱分子のようになってよくイタズラをしたという。成績は100人中40番位で勉強でもスポーツでも目立たなかった。高校3年では就職コース(クラス51名中女生徒37名)のクラスで女生徒の圧倒的な支持を得て学級委員に選ばれている。この頃、級友に貨物船で世界を回る夢を語っていた。

(次回に続く)

(注1) 植村直己の主な冒険歴など

1968年6月27日 アマゾン川源流から河口まで6000キロを単独筏下り

1970年5月 日本人初のエベレスト登頂(松浦輝夫と共に)

1970年8月 マッキンリー単独登頂を果たし、世界初の五大陸最高峰登頂

1971年10月 日本列島南北3000キロを徒歩で縦断

1973年4月 グリーンランド3000キロを犬橇単独行

1976年5月 北極圏1万2000キロを犬橇単独行

1978年4月 世界初の犬橇単独行で北極点到達

1978年8月 犬橇単独行でグリーンランド縦断

1984年2月 世界初のマッキンリー冬季単独登頂(登頂後消息を断つ)

受賞歴 国民栄誉賞(1984年)、第26回菊池寛賞(1978年)、英国バラード・イン・スポーツ賞(1979年)他

著書 「青春を山に賭けて」「エベレストを超えて」「極北に駆ける」「植村直己 妻への手紙」

(以上文春文庫、新書)「北極圏1万2000キロ」(ヤマケイ文庫)他

(注2) エドモンドヒラリー卿 ニュージーランド出身の登山家、冒険家。1953年5月世界初のエベレスト登頂に成功(テンジン・ノルゲイと共に)